ジェンダーに関する包括的言語使用(lenguaje inclusivo)について

–スペイン語を例に–[1)]

糸魚川 美樹

1. はじめに: 「包括的言語使用」とは

本稿では、あらゆる性自認を排除しない言語使用として近年賛否両論あり注目されているスペイン語の「包括的言語使用(lenguaje inclusivo)」について概観し、反対派の言説を考察することを目的としている。

1970 年代以降、フェミニズムの隆盛とともにスペイン語の文法上の性が性差別と結びつけて語られるようになり、「非性差別的言語使用(lenguaje no sexista)」の議論が高まった。行政や教育機関、労働組合などでは言語使用のガイドラインや提案が作成されるようになった(糸魚川 1997, 1999, 2005)。このような運動は、女が男と同等に表現されることを求めて始まり、世界のさまざまな言語に広がっていった[2)]。ロマンス諸語においては、女の不可視性が問題とされ職業名詞の女性化(藤村・糸魚川 2001)や男性形の総称用法の回避と代替表現が中心的に提案されてきた。

2000 年代に入ると、非性差別的言語使用に加えて「包括的言語使用(lenguaje inclusivo)[3)]」という名称が登場する[4)]。この 2 つは、前者が言語における女の可視化を目的とした運動、後者がすべての性自認を含む表現の運動として区別して理解されることもあれば(資料 1)、同じ概念を指すものとして用いられることもある。Lidia Becker は、「lenguaje inclusivo または lenguaje no sexista とは」と二つをまとめて説明し、「言語の政治的公正のもっとも広範な文脈に位置しうる言語革新(innovación)の表明」であり、「言語使用における、また言語使用を通して多様な性の平等を実践するための、特定の社会的集団による言語使用パターンの創造」(Becker 2019: 5)と述べている。国連は「性に関する包括的言語使用(lenguaje inclusivo en cuanto al género)」という表現を用いて、「話しことば及び書きことばにおいて、性別、ジェンダー、性自認で差別しない、またジェンダーのステレオタイプを断ち切るような(no perpetuar) 表現のあり方」と紹介している(資料 2)。一方、欧州議会は、「lenguaje no sexista や lenguaje inclusivo o lenguaje equitativo en cuanto al género の総称」として“lenguaje neutral en cuanto al género” という表現を使用している(資料 3)。

以下では、まず、性自認によって差別されない言語使用という考え方の広がりと、lenguaje inclusivo と呼ばれるスペイン語の用法をとりあげる。後半では、lenguaje inclusivo を批判する側の言説の特徴について考察する。

2.「包括的言語使用」概念の広がり

スペイン語の包括的言語使用の考察に入る前に、あらゆる性自認を排除しない言語使用という考え方がさまざまな言語でさまざまな形で話題になりつつあることを簡単に紹介する。

国連は、前述した「性に関する包括的言語使用」をジェンダーの平等を推し進める戦略として

位置付け、スペイン語の他にアラビア語、中国語、英語、フランス語、ロシア語でも類似したウェブページを開設している[5)]。スペイン語については母語話者やスペイン語上級学習者向けに lenguaje inclusivo のオンラインセミナーを定期的に開催するなど、行政や公的機関の職員が学習すべきものとして位置付けている(資料 2)。

自己表現の問題としても話題になっている。2020 年 3 月 20 日付ファッション・ライフスタイル誌 *VOGUE* 日本版が「あなたはどう呼ばれたい？多様性時代の代名詞考察」という記事を掲載している(資料 4)。その中で、「各国の『代名詞』事情」としてスウェーデン、アメリカ、イギリス、ドイツ、フランス、スペインを取り上げ、それぞれスウェーデン語、英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語の「ジェンダーニュートラルな代名詞」やそれを取り巻く事情について紹介している[6)]。

ロマンス語研究との関係では、2019 年 11 月にパリの高等師範学校において Colloque «Entre masculine et feminine-Approches contrastives dans las langues romanes» が開催され、その中でロマンス諸語の包括的言語使用に関する研究発表が多数あった(資料 5)[7)]。

3. 包括的言語使用とは

では、スペイン語のどのような表現が包括的(inclusivo)と言われているのか。本節では lenguaje inclusivo と呼ばれる表現について見ていく。

3.1 包括的な用法とは

文法上の男性と女性が対照的な対立をなしていないことがスペイン語の性差別問題の出発点である。指示対象の性が不明な場合や両性の存在が男性(形)で表現されること、女性(形)は女に言及するときにだけ使用されること、したがって男性(形)が使用された際そこに女が含まれるかどうかが曖昧な場合があること、女性形には対応する男性形にはない否定的な意味合いを帯びる語があることなどが問題とされてきた。これらの解決策として、女に言及する際に積極的に女性形を使用すること(職業名詞の女性化)と、男性形の総称的用法を回避することが提案された。その後、男性・女性という 2 分法も問題とされ、男性形でも女性形でもない第 3 の語形がデモ集会やソーシャルネットワーキングサービス(SNS)などを通して広がっていく。ここでは、包括的言語使用の代表的・象徴的な例を挙げる。

1) 職業名詞の女性化
   médica (<médico), presidenta (<presidente), jueza (<juez), portavoza (<portavoz)
2)女性形・男性形（またはその逆）の並列 (desdoblamiento)：
   niños → niños y niñas, amigos → amigas y amigos, todos → todos y todas
3) 「/」の利用：niños/as, amigos/as, todos/as
4) @の利用：niños → niñ@s, amigos → amig@s, todos → tod@s
5) 集合名詞、抽象名詞による代替表現：gente, persona, plantilla, profesorado, alumnado
6) -e の使用

総称的用法：niños → niñes, amigos → amigues, todos → todes
個人を表す：niño/niña → niñe, chico/chica → chique
7) -x の使用：niños → niñxs, amigos → amigxs, todos → todxs

これらは lenguaje inclusivo と呼ばれる表現ではあるが、それぞれの根底にある考え方は一貫しているわけではなく、それぞれのアプローチの間には対立関係すら見出すことができる。1)については女の可視化ではあるが、性の 2 分法の維持という批判も成り立つといえる。2)から 7)は男性形の総称用法の代替表現で、そのうちの 2)から 4）は女を可視化し男性形の優位性に対抗しているものの、こちらも性の２分法の維持といえる。5)から 7)は性の２分法に対抗するものである。3)、 4)、 7)は表記のみ有効でどのように発音するかは話者に任される[8)]。

6)の語尾-e/ -es の用法も多様で、 “Hola a todes.” のようにすべての性を含む用法もあれば、“Hola a todos, todas y todes.” のように第 3 の性を指す用法もある。複数形だけでなく、個人を指す chique や 3 人称の代名詞 elle のような例もある。第 3 の語形としての-e/-es は、従来の-o/-a を維持したまま性的少数者の自己表現と、人に言及する際の 3 人称代名詞の中性形として使われる傾向にある[9)]。他方、男性形・女性形の代替形として性の区別をしない「新しいニュートラルな総称」の用法もあり、チリやアルゼンチンの大学ではすでに論文等の執筆に-e を認めている大学もあるという(Instituto Cervantes 2021: 46) 。

用法が一致していないのと同様に、包括的言語使用のガイドラインによって推奨する・しない用法も異なる。発音が明確でない 3)、 4)、 7)は推奨しないガイドラインや、6)は勧めないが 7)は奨励するというように、それを作成する機関によって異なる。たとえば、アルゼンチンの Ministerio de las Mujeres, Géneros y Diversidad が作成しているガイドラインでは、7)の-xs は勧めるが、6)の-e による -a/-o の代替は推奨しないとしている。理由として、長い間言語の性差別と闘ってきた女たちを可視化する-a をなくことに対する抵抗を挙げている(Ministerio de las Mujeres, Géneros y Diversidad 2020)。

3.2 包括語尾 “@, x, e” に関する調査

語尾 “@, x, e” の使用については、ある調査結果がすでに報告されている。Fundéu BBVA と Instituto de Ingeniería del Conocimiento は、「性への言及を避けるため」に使用される “@, x, e” の Twitter 上の使用を、 “niños, nosotros, todos, ciudadano” の 4 語の使われ方から調査し地域別に集計している。対象地域は、赤道ギニアを除くスペイン語を公用語とする 20 か国とアメリカ合衆国とプエルトリコで、20 日間ランダムにデータを収集し分析している (Fundéu BBVA e iir 2020)。それによれば、頻度の差はあるがすべての調査対象地域でいずれかの語尾が確認されている。これらの語尾がもっとも多く検索された国はスペイン、アルゼンチン、メキシコであった。4 語のうち “@, x, e” とともにもっとも多く検索されたのは todos であったが、使用全体の割合では niños の方が高かった。3 つの語尾でもっとも使用頻度が高かったのは@であるが、各地域のもっともよく使われる語尾は単語によって異なる場合がある。たとえば、スペインでは “niñ@s, nosotr@s, tod@s” とそろっているが、アルゼンチンでは “niñes, nosotrxs, todxs” という結

果となっている[10)]。

3.3 総称語尾としての-e の提案

語尾-e は、近年登場したわけではなく 20 世紀後半にはすでに言及されている。1988 年 Álvaro García Meseguer は著書 *Lenguaje y discriminación sexual* 第 3 版において、 指示対象の性別がわからないような場合に用いる -e (1)、両性の存在に言及する複数形-es (2)の例を示し、語尾-e の可能性を論じている。定冠詞複数形 “les” としている (García Meseguer 1988: 232)。(下線は引用者による)

(1) ¿Cómo está tu niñe?

(2) Les ministres franceses y los ministros españoles se han reunido.

例(2)については、-es を用いることにより、フランスの閣僚には女と男がおりスペインには男しかいないということも示すことができ、「男性複数形(の総称用法)は女の存在を隠蔽するだけでなく、性差別的な状況も隠蔽する」(同上)と-es のメリットを述べている。また、同書では、1977 年出版の初版においてすでに-e/es に言及していること、社会学者 María Jesús Izquierdo が 1983 年に出版した著書 *Las, los les (lis, lus). El sistema sexo/ género y la mujer como sujeto de transformación social* においても、両性の存在に言及するのに-e を使用していることも紹介しており、少なくとも 40 年以上前に-e/es の発想があったこと、複数の論者がこの時代に-e/es を提案していたことがわかる(García Meseguer 1988: 233)[11)]。ただし、現在のように、性的少数者を含む表現という意識があったかどうかは不明である。

4. 反・包括的言語使用とスペイン王立学士院

さまざまな公的機関が lenguaje inclusivo の考え方に賛同を示しているとはいえ、強い反発もある。とくにスペイン王立学士院(RAE)は、“La RAE siempre ha estado en contra del lenguaje inclusivo...” (資料 6) と RAE 会員が発言しているように、これまでさまざまな媒体でにおいて反・非性差別的言語使用、反・包括的言語使用を表明してきた。

2009 年に刊行された『スペイン語新文法』「第 2 章　性」では、スペイン語の男性形は無標で総称用法が定着しており、集合名詞や抽象名詞による代替表現は「語彙的、統語的観点から見て不完全で、結果として不適切であるという考え方が多数派である」(RAE y ASALE 2009: 88)と述べ、本稿 3.1 の 5)に分類される用法を否定している。

2012 年 3 月には、RAE 会員 Ignacio Bosque の名で報告書 “Sexismo lingüístico y visibilidad de la mujer” (Bosque 2012)を RAE のウェブサイトで発表した。報告書では、非性差別的言語使用のガイドラインとその作成者を強く批判している(糸魚川 2014)。発表の翌日、報告書の全文がスペインの全国紙 *El País* のデジタル版と印刷版の日曜日別冊付録にも掲載され、非性差別言語使用に対する RAE の「初めての見解」として大きく取り上げられた。これに賛同する形で、ガイドラインの内容に対する批判が噴出した。報告書への賛同署名をオンライン上で求める言語学者グループの動きもあり(糸魚川 2014)、言語変革を進める側と反対派の議論が「再燃」した(Márquez 2013: 7)。

2018 年に出版された RAE による *Libro de estilo de la lengua española* では、その中の “Cuestiones gramaticales” の “Género: masculino y femenino” [12)]において男性形の総称用法について言及し、言語学的に男性形が女を排除すると考える理由はないと述べている。また男性形と女性形の並列(本稿 3.1 の 2 を参照)は不要であるとし、 “l@s niñ@s, les niñes, lxs ninxs” (本稿 3.1 の 4)、 6)、7)を参照)には「○, ×」印(Marca usos que se deben evitar)を付している(RAE 2018: 21-22)。

同年 7 月には、スペイン副首相が “Tenemos una Constitución en masculino” (資料 7)を理由に、RAE に対し憲法における「lenguaje inclusivo の良い用法(el buen uso)」について検討(un estudio)を求めた(RAE 2020: 4)。報道では、「憲法を包括的言語使用に適合させる」ことについての検討を依頼したと述べている(資料 7, 8)。

これに対し RAE は 2020 年 1 月に報告書 “Informe de la Real Academia Española sobre el lenguaje inclusivo y cuestiones conexas” を発表し、現スペイン憲法の表現に文法的な修正を加える理由はないとする回答を発表した(RAE 2020: 2) [13)]。RAE は報告書の中で、文脈から明らかに女を含んでいると理解される男性形の用法も lenguaje inclusivo と解釈可能であり(3)、現憲法はそのような解釈を採用したと主張している(RAE 2020: 5-6)。

(3) … la expresión *lenguaje inclusivo* aplica también a los términos en masculino que incluyen claramente en su referencia a hombres y mujeres cuando el contexto deja suficientemente claro que ello es así, de acuerdo con la conciencia lingüística de los hispanohablantes y con la estructura gramatical y léxica de las lenguas románicas. Es lo que sucede, por ejemplo, en expresiones como *el nivel de vida de los españoles* o *Todos los españoles son iguales ante la ley*.

男性形の総称用法も包括的言語使用であるから、現憲法は lenguaje inclusivo で表現されているという検討結果である。

5. 包括的言語使用を否定する言説

前節で見たように、男性形の総称用法は定着しているというのが、RAE が包括的言語使用に反対する理由の 1 つである。ここでは、RAE をはじめ文法家による反・包括的言語使用の言説における 3 つの特徴について検討する。なお、引用中の下線および括弧による説明は引用者による。

5.1 文法は「自然」で「中立」である

Lidia Becker は、2012 年から 2018 年に新聞のデジタル版に掲載された、lenguaje inclusivo に関する Ignacio Bosque と Concepción Company Company のインタビューを分析している。その中で、言語や文法は “natural/ común/ real” という形容詞で語られ、lenguaje inclusivo は “artificial/ oficial (ideológico)” という形容詞で語られていることを検証し、2 人の文法家の言説が「言語自然観」にもとづいていることを指摘している(Becker 2019)。Becker の指摘は、筆者が確認した次の例にもあてはまる。

(4) “Los idiomas tienen una estructura <u>natural</u> que no debemos de alterar” (資料 9)

(5) “(el lenguaje inclusivo) es <u>artificial</u>” (資料 10)

(6) “La gramática es neutra” (資料 11)

(7) “La gramática es totalmente aséptica. (資料 12)

(8) … aunque las lenguas son creación humana, los hablantes no pueden intervenir consciente o planificadamente en ellas para alterar su estructura. (Álvarez de Miranda 2018: 12)

「言語自然」観は包括的言語使用の反論には珍しいものではない。2012 年の RAE 報告書賛同署名活動をおこなった言語学者グループの議論にも同様の特徴がみられる (糸魚川 2014)。

5.2 男性形の総称用法は歴史的に定着している

男性形の総称用法は定着しているため、ほかの表現で代替する必要はないという主張では、その「長い歴史」と話者数の多さを強調するとともに、「私たちの言語」「私たちスペイン語話者」と 1 人称複数形を用いるという特徴が挙げられる。

(9) “los españoles no podemos manejar la lengua por contingencias políticas como si fuésemos sus usufructuarios ni podemos jugar con circunstancias de urgencias políticas con algo que comparten 500 millones de personas” hispanohablantes, ...(資料 13)

(10) “Es una Constitución escrita en español, y el español tiene una gramática que es la decantación de siglos de evolución de la lengua” (資料 13)

(11) ... en la nuestra (lengua), como en otras (lenguas), el armazón de su funcionamiento morfológico y sintáctico no ha variado desde tiempos medievales, desde que la lengua existe, ... (資料 7)

(12) En ciertos casos, las propuestas de las guías de lengua no sexista conculcan aspectos gramaticales o léxicos firmemente asentados en nuestro sistema lingüístico, ... (Bosque 2012: 1)

(3) …de acuerdo con la conciencia lingüística de los hispanohablantes ... (再掲)

5.3 ことばを変えても意味がない

ことばを変えても社会の差別はなくならない、他にもっとやるべきことがある、という主張である。例は省略するが、このような発言では、自身は性差別には反対であることを強調するという特徴もある。

(13) En todo caso ¿no será mejor concentrar las energías en los auténticos y verdaderos problemas de fondo que afectan a las mujeres y a su instalación y papel en la sociedad? (Álvarez de Miranda 2018: 89)

(14) Igualdad no es que te llamen arquitecta, es que te paguen igual y tengan las mismas oportunidades. (資料 12)

(15) “El problema está en confundir la gramática con el machismo” (資料 12)

5.4 まとめ

スペイン語の性を性差別的ととらえ、スペイン語を変えていこうとする非性差別的言語使用や包括的言語使用の運動がイデオロギー的であることは明らかである。ただし、これに反対する側もさまざまなメディアを利用しことばの変化を抑制しようとしており、同様にイデオロギー的である。それぞれの基準からどのような表現を避けるべきか、どのような表現が推奨されるかを述

べているという点において、*Libro de estilo de la lengua española* を刊行する行為と、包括的言語使用のガイドラインを作成する行為は同じと言えるだろう。ことばに意識的に働きかけているという点は両者に共通していると言えるが、反対派はそのことを不問に付したまま包括的言語使用の人為性を批判している。「言語が人間を離れて実在するという言語自然観は一つの願望ないし言語観でしかなく、その言語観自体、意識的な介入の一種」なのである(木村 2005: 29)。

ことばの差別を訴える側は、ことばを変えることで性に基づく賃金格差や機会の不平等がなくなるとは言っていない。男性形の総称用法をなくすことは男性形の総称用法をなくすことであり(Cameron 1995)、それ以上でもそれ以下でもない。ことばはそれ自体で一つの社会制度として機能しており、ことばを使うことそれ自体が社会的実践である。ことばの変革はそれ自体が社会変革なのである(Cameron 1990, 木村 1999, 佐野 2015)。このような運動がめざすのは、「従来声をあげることができなかった、一定のことばを無理矢理選択させられてきた人びとが、やっと、ことばの使用それ自体に埋めこまれている抑圧や居心地の悪さをはっきりと表明し、新しい選択肢を提示することができる」ということ(佐野 2015: 110)であろう。

6. おわりに：包括的言語使用の難しさ

本稿では、スペイン語の包括的言語使用とそれに対する批判を概観し検討を加えた。包括的言語使用については既成のコーパスでは収集が難しく、実際の用法についての分析は今後の研究が待たれる。それをめぐる言説についても、本稿では反対論のみ取り上げたが、賛否両論含めて研究対象とされなければならない。これについては今後の課題としたい。

筆者は研究対象として包括的言語使用を扱っているが、スペイン語使用者としてどのように向き合うかも当然問われると考えている。最後に、実践の「難しさ」について述べておきたい。

筆者は、第 2 回 Congreso Internacional de Diversidad Sexual y Género en la Educación, la Filología y las Artes への口頭発表の申請のための要約と口頭発表原稿を、この分野を理解するスペイン語母語話者の協力を得て、男性形の総称用法を使わないで作成した。包括的言語使用(とくに、男性形の総称用法の回避)を実践することは母語話者でも難しいと言われており、スペイン語学習者にとってはなおさらである。

ただし、実践の「難しさ」は、話者個人の「慣れ」や言語運用能力だけによるものではないことも強調したい。言語実践における「規範」(王立学士院や文法家が支持する用法)からの逸脱は何らかの社会的制裁として話者に返ってくることが予想され、使うという選択が抑制される場合もある。筆者の実践は、包括的言語使用が歓迎される空間であったから可能であったとも言える。「個人や特定集団の変革的な言語行為を拒む社会的制裁の強さ及びそのような制裁の意義を含めてさらに議論される必要がある」(木村 1999: 34)と言われていることからも、RAE や文法家による包括的言語使用への批判やその社会的な影響力について今後も多様な視点からの考察が求められる。

註

1) 本稿は、2021 年 5 月 15 日にオンラインで開催された日本ロマンス語学会第 59 回大会において統

一テーマ「ロマンス諸語の社会言語学」のセッションで発表した「包括的言語使用をめぐる議論−スペイン語を例に」に加筆修正をしたものである。なお、本研究は科研費基盤研究 C 補助金交付研究(課題番号 19K00851)の成果の一部である。

2) 本項では、文法上の性には女性・男性を用い、人の性には女、男を用いる。順序についても議論の対象になっていることから、順序を固定しない。

3) lenguaje incluyente と呼ばれることもある。

4) スペイン王立学士院のスペイン語コーパス CORPES XXI (https://www.rae.es/banco-de-datos/corpes-xxi）で検索された lenguaje inclusivo のもっとも古い例は、2009 年のものであった。

5) https://www.un.org/es/gender-inclusive-language/を参照。スペイン語による説明では lenguaje inclusivo を、「話しことば及び書きことばにおいて、性別、ジェンダー、性自認で差別しない、またジェンダーのステレオタイプを断ち切るような(no perpetuar) 表現のあり方」と紹介している。

6) なお、*VOGUE INDIA* では、同記事は“Gender neutral pronouns are important: Not everyone identifies with he or she”というタイトルになっている (2020 年 1 月 27 日付)。*VOGUE JAPAN* における「各国の『代名詞』事情」は、*VOGUE INDIA* では“A global perspective on gender-neutral pronouns”である。なお、スペイン語についての情報は一部正確性に欠ける。

7) その中の 1 件 Daniel Elmiger 氏の口頭発表“Les guides de rédaction non sexiste/ inclusive dans les langues romanes: un genre textuel évolutif”によれば、ロマンス諸語の中でスペイン語の非性差別用法に関する提案やガイドラインが最も多く作成されている。

8) ただし、latinos/ latinas に由来する lantinx は、[latínks]と発音して使用されている。

9) 大手インターネットメディアサービス Netflix 配信のスペインのドラマシリーズ Paquita Salas シーズン 3 第 3 話では、ella/ él のどちらにもあてはまらないと判断される人物に言及する代名詞として ello が登場する。形容詞 guape が使用されている場面もある。同サービス配信のメキシコのドラマ La casa de las flores シーズン 3 第 9 話では、総称としての nosotros の使用にしっくりこない登場人物が nosotres を使うシーンがある。

10) “ciudadanos”は他の 3 語と比べて極端に使用例が少なく、言及されていない。

11) ただし、2021 年に発表された第 3 版(Izquierdo 2021)では García Meseguer が指摘しているような -e は見つけられず、語尾には@が使用されている。García Meseguer も 1992 年に出版した*¿Es sexista la lengua española?* では、-e/es の用法には言及していない。1970 から 1980 年代の革新的な主張をその後トーンダウンさせる傾向がこの分野にはあると筆者は考えており、議論の展開など今後検証が必要である。

12) 本書では章番号等がふられていない。

13) この件については、福嶌(2021)においてすでに報告されている。なお、RAE が法律上の表現について見解を発表したのはこれが初めてではなく、2004 年に「ジェンダー」を意味する género の使用に関して意見を提出している(糸魚川 2010)。

参考文献

糸魚川美樹(1997)「スペイン語における女性形職業名詞−女性形名詞形成の背景と女性形が持つ意味合

い」、日本イスパニヤ学会『イスパニカ』41 号、13-25
----- (1999)「 “la abogado”から “la abogada”へ－カスティーリャ語における活動を表す名詞と性について」、日本ロマンス語学会『ロマンス語研究』 32 号、11-20
----- (2005)「ジェンダー化された言語のゆくえ」、「社会言語学」刊行会『社会言語学』5, 85-103
----- (2010)「スペイン語における性をめぐる記述に関する予備的考察」、愛知県立大学高等言語教育研究所『ことばの世界』2 号、55-66
----- (2014)「スペイン語における『女性の可視性』をめぐる議論」、「社会言語学」刊行会『社会言語学』14 号, 141-153
木村護郎クリストフ (1999)「書評　宇佐美まゆみ(編著)『言葉は社会を変えられる』世界社会言語学会『不老町だより』4 号、32-36
----- (2001)「言語は自然現象か　言語権の根拠を問う」、「社会言語学」刊行会『社会言語学』1 号, 39-55
----- (2005)『言語にとって「人為性」とは何か　言語構築とイデオロギー：ケルノウ語・ソルブ語を事例として』三元社
佐野直子(2015)『社会言語学のまなざし』三元社
福嶌教隆(2021)「スペイン王立学院(Real Academia Española) −スペイン語の規範と記述を追究する人々」『ことばと文字』14 号、くろしお出版、84-91
藤村逸子・糸魚川美樹(2001)「フランス語における職業名詞の女性化-カスティーリャ語との比較」名古屋大学大学院国際文化研究科『言語文化論集』23(1)、141-156
Álvarez Miranda, Pedro (2018) *El género y la lengua*. Turner Minor
Becker, Lidia (2019) “Golotopolítica del sexismo: ideologemas de la argumentación de Ignacio Bosque y Concepción Company Company contra el lenguaje inclusivo de género” *Theory Now. Journal of Literature Critique, and Thought,* 2-2, pp. 4-25, Granada.
Bosque, Ignacio (2012) “Sexismo lingüístico y visibilidad de la mujer” (https://www.rae.es/sites/default/files/Sexismo_linguistico_y_visibilidad_de_la_mujer_0.pdf)
Real Academia Española y Asociación de Academias de la Lengua Española (2009) “2. El género” en *Nueva Gramática de la lengua española*, vol. 1. Espasa Libros, págs. 81-126, Madrid.
Cameron, Deborah (1990) “Demythologizing sociolinguistics: why language does not reflect society”, Joseph, J. E. / Taylor, T (ed.): *Ideologies of Language.* Routledge, pp.79-93, London.
---------- (1995) *Verbal Hygiene,* Routledge. London/ New York.
Fundéu e Instituto de Ingeniería del Conocimiento (2020) “Elección de uso de marcas inclusivas en países de habla hispana” (https://fundeu.es/documentos/marcasinclusivastwitter.pdf)
García Meseguer, Álvaro (1988) *Lenguaje y discriminación sexual*. Montesinos, Barcelona.
---------- (1994) *¿Es sexista la lengua española? Una investigación sobre el género gramatical*. Paidós. Barcelona.
Instituto Cervantes (2021) *Guía de comunicación no sexista*. Versión Kindle.
Izquierdo, María Jesús (2021) “Las, los les (lis, lus). El sistema sexo/ género y la mujer como sujeto de

transformación social", tercera edición.
(https://www.researchgate.net/publication/349924110_las_los_les_lis_lus_El_sistema_sexo_genero_y_la_mujer_como_sujeto_de_transformacion_social)

Márquez, María (2013) *Género gramatical y discurso sexista*. Editorial Síntesis, Madrid.

Ministerio de las mujeres, Géneros y Diversidad (2020) *(Re) Nombrar: Guía para una comunicación con perspectiva de género*.
(https://www.argentina.gob.ar/generos/renombrar-guia-comunic-con-persp-de-genero)

Real Academia Española (2018) *Libro de estilo de la lengua española según la norma panhispánica*. Editorial Planeta, Barcelona.

---------- (2020) "Informe de la Real Academia Española sobre el lenguaje inclusivo y cuestiones conexas" (https://www.rae.es/sites/default/files/Informe_lenguaje_inclusivo.pdf)

資料

1. http://www.laaab.es/2021/01/pildora-lenguaje-inclusivo/
2. https://www.un.org/es/gender-inclusive-language/toolbox.shtml
3. https://www.europarl.europa.eu/cmsdata/187095/GNL_Guidelines_ES-original.pdf
4. https://www.vogue.co.jp/change/article/gender-neutral-pronouns-cnihub
5. https://www.lattice.cnrs.fr/actualite/entre-masculin-et-feminin-approche-contrastive-francais-et-langues-romanes/
6. "El lenguaje inclusivo salta de la calle a las instituciones" *El País*, 13/07/2018. https://elpais.com/cultura/2018/07/12/actualidad/1531420715_324614.html
7. "¿Una Constitución 'bigénero'?" *El País*, 27/07/2018. https://elpais.com/elpais/2018/07/19/opinion/1532016490_743662.html
8. "Si el lenguaje no te incluye, no existes" *El País*, 16/07/2018. https://elpais.com/cultura/2018/07/16/actualidad/1531754658_959480.html
9. "¿Por qué molesta tanto el lenguaje inclusivo?" https://www.youtube.com/watch?v=7wl6TcKz_7c
10. "Lenguaje "incluyente", superficial y muy peligroso asegura Concepción Company" https://www.youtube.com/watch?v=YlxFO30nS7Q
11. "¿Es sexista la lengua española? | ECN en la FIL Guadalajara | Concepción Company Company" https://www.youtube.com/watch?v=mJVlyKkNWtI
12. "Concepción Company Company: <<El lenguaje inclusivo es una tontería>>" *La Voz de Galicia*, 5/01/2018. https://www.lavozdegalicia.es/noticia/cultura/2018/01/05/lenguaje-inclusivo-tonteria/0003_201801G5P34991.htm
13. "El director de la RAE no ve el "clima político" para reformar la Constitución" *El País*, 17/07/2018. https://elpais.com/cultura/2018/07/17/actualidad/1531848555_551052.html